

## 企画展「秩父 すばらしき大地の魅力 —秩父の地質と博物館のあゆみ—」

坂本 治・本間岳史・杉内由佳

秩父地方は、明治のはじめから地質的な研究が行われ、「日本地質学発祥の地」としてその名が広く知られています。風光明媚な自然は、人々が憩う行楽の場として、また、勉学の場としても広く利用されてきました。

まさに秩父は、地質学の教室として称賛するに値し、フィールドには実にさまざまな地質情報が刻まれています。このような背景をもとに古くから博物館が開設され、わが国の科学系博物館の草分けの一つでした。

今回の企画展は、秩父の魅力を地質学的新知見や、博物館のあゆみ、さらに皆様方から提供いただいた旧博物館と野外観察の思い出写真などで構成しました。

### 秩父の大地の魅力

すばらしい秩父の自然は、およそ3億年におよぶ大地のダイナミックな営みによってつくられました。それは、岩石・鉱物・化石に秘められた地殻変動や河川の浸食のシナリオから読み取ることができます。展示では、以下のテーマにより大地からのメッセージを紹介しています。

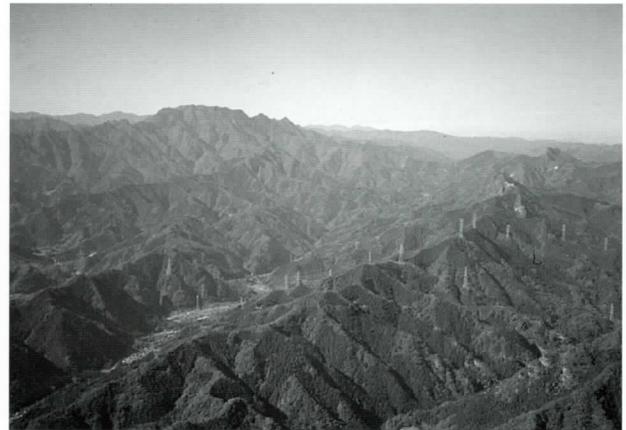
### 秩父 大地のすがた

奥秩父は、人を寄せつけない険しい山並みをしています。標高2000mもの山々から流れ下る無数の溪流は、やがてひと筋の荒川に合流します。川を下るとそこには、秩父盆地の広い大地が開けます。ここは生活基盤となり、人々は自然と一体となって生活をしています。さらに、その先は長瀬の峡谷へと変わります。

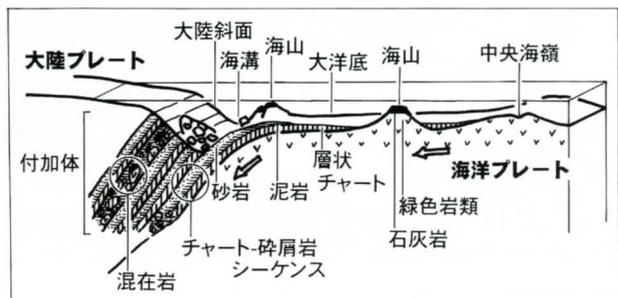
### 秩父山地の骨格形成の時代 —海と地底の物語— (約3億年前～約6550万年前)

秩父山地の骨格は、古生代末から中生代末に至る、マントル対流による海洋プレートの移動によって構築されました。

秩父山地には、チャートや石灰岩などの硬い岩石が広くみられます。古生代の石炭紀から中生代三畳紀の大洋底に堆積した放散虫などの死骸は「チャート」、火山島をつくる溶岩や火山灰は「緑色岩」、火山島にすみついたサンゴやウミユリなどの生きものは「石灰岩」となりました。これら



秩父の山並み 小鹿野町上空より



秩父山地の骨格形成時のメカニズム

の岩石は、中生代ジュラ紀以降に陸地から運ばれた砂や泥の堆積物と混ざりメランジュ（混在岩）や付加体という複雑な地層を形成しました。その一部はプレートの沈み込みによって、地下深くに押し込まれ、長瀬にみられる色とりどりの結晶片岩類となり、本来見ることのできない地下のダイナミックなドラマを地表でみることができます。また、山中地溝帯は、白亜紀に大陸縁辺の浅い海などに堆積した頁岩・砂岩・礫岩などからなり、アンモナイトなどの化石を産します。

### 秩父湾の時代 —化石動物は語る— (約1650万年前～約1500万年前)

秩父盆地には、約1500万年前（新第三紀中新世）の厚さ約5000mの海成層が堆積しています。この地層は、現在の秩父盆地のもとになった「秩父湾」に土砂が運ばれて形成されました。盆地の北縁から西縁部に基底部（最初に堆積した地層）があり、南東に向かって順次上位の地層が重なっています。この厚い地層は、礫岩・砂岩・泥岩から